

失われた誇りを取り戻す

そらち・炭鉱(やま)の記憶



現存する日本最大規模の立坑住友炭鉱立坑
(三笠市)

北海道の開拓にも、日本の発展にも炭鉱は大きな役目を果たしてきたが、エネルギー革命の波を受け、国内の炭鉱は事実上ほぼ消滅した。元々が石炭を産出するためにできた旧産炭地のまちは、閉山後もぬけがらのように炭鉱遺産がそのまま散在している。ゴミとまでいわれたこれらの遺産が、いま再び注目されつつある。

空知の炭鉱のはじまり

明治元(1868)年、幌内で石炭の炭層露出面が発見されたが、できたばかりの開拓使は石炭に関心をはらわなかった。明治5(1872)年になってあらためて開拓使役場に石炭が提出され、開拓使の榎本武揚が分析したところ、良質の石炭であることがわかり、その重要性が認識された。

翌年より、日本の鉱山開発のために明治政府がアメリカから招聘した鉱山技師ベンジャミン・スミス・ライマンらによって本格的な調査が開始され、明治12(1879)年、官営幌内炭鉱が開坑する。明治15(1882)年には幌内と手宮を結ぶ鉄道が北海道で初めて開通(全国で3番目)し、幌内炭鉱は出炭を開始した。

その後もライマンから学んだ助手たちなどが調査を進め、東西30km、南北85kmに及ぶ日本最大級の石狩炭田が確認され、次々に炭鉱が開坑していった。

国を支えた炭鉱

炭鉱は明治から昭和にかけて、わが国の重要な産業として、国を支え続けた。国内での自給が唯一可能なエネルギー資源として、太平洋戦争開戦でその重要度は増し、さらに終戦後も、傾斜生産方式により国を立て直すために増産に次ぐ増産を重ねた。石炭なくして戦後復興はありえなかったといってよい。

石炭を掘るためにはあらゆる技術が必要であり、山奥の僻地で多くの職員や鉱員が生活するためには物資輸送、電力、水道、機械、建設から医療、教育、娯楽に至るまで、あらゆる産業が付随する必要がある。これらは炭鉱会社により、ほとんど全てを自前で完備していた。

炭鉱街にはいつも人があふれていた。映画は東京と同時に封切られ、大相撲の巡業や歌手の公演も頻繁にやってきた。テレビや冷蔵庫なども登場当初の高価なうちからいち早く普及した。夜はズリ山の黒い色に負けじとするような眩しい光に満ちていた。最盛期には100鉱を超えた空知の炭鉱地域の人口は83万人にものぼり、当時の札幌市の人口もしのぐほどになっていた。

炭鉱の急激な衰退

しかし、戦後復興が一段落する昭和30年代にはエネルギー革命が訪れる。固体の石炭よりも流体の石油のほうが効率の面でも輸送や利用の面でも断然有利だった。また、海外炭がコストで優位に立ち始める。政府は昭和30年に石炭鉱業合理化臨時措置法を制定し、効率の悪い炭鉱をたたみ、割のいい炭鉱に注力して効率化する政策を推進。炭鉱は懸命な合理化で生産性も格段に向上したが、石油や海外炭とのメリットの差は広がる一方となり、



ケージ（坑内へ降りるエレベーター）に乗り込む炭鉱マン
地下1,000mの深さへ一挙に降りてゆく
（北炭幌内炭鉱／三笠市）昭和63年頃 斉藤靖則さん撮影

ついに石炭産業の存続を断念。昭和36年に産炭地域臨時措置法（以下「産炭法」）を制定し、急激な地域の崩壊を招かないよう計画的にソフトランディングさせる方針に転換した。

さらに追い打ちをかけたのが相次ぐ炭鉱事故。「ケガと弁当は自分持ち」といわれた戦前に比べれば、予防技術も進展して事故は減少したものの、根本的にはやはり危険な作業であることに変わりない。昭和56年の北炭夕張新鉱事故や昭和60年の三菱南大夕張炭鉱事故など、マスコミで報道されるたびに炭鉱の負のイメージだけが増大していった。また、事故のたびに操業停止や、時には閉山に追い込まれたりして、炭鉱会社の経営も脅かした。

こうして平成7年の北炭空知炭鉱まで、ひとつ、またひとつと閉山していった。隆盛の絶頂からわずか30年。空知の炭鉱は全て、新しい世紀を迎えることなく、国を支える役目を終えた。

炭鉱イメージの払拭

産炭法などにより多くの国費を投入され、また相次ぐ事故のため、炭鉱に対するイメージは急速に転落した。国を支えてきた誇りが、一転してお荷物扱い。産炭地の住民自身、炭鉱に対する思いは、失った賑やかなわがまち、失った仕事、失った誇り、そして失った家族や仲間など、どちらかといえば悲しい記憶が先立つ。労働争議や炭鉱社会の体制への批判などの苦い思いも、危険な重労働の苦しい思いもあった。草木に埋もれた選炭場跡やさび付いて立ちつくしている立坑槽などは「ゴミ」でしかなく、「先立つものがあればすぐにでも撤去したい」と思っている人が多かった。

閉山後は多くのまちが、過去に蓋をするかのように、炭鉱とは全く関係のない産業やテーマパークなどで地域振興を図ろうとし、炭鉱イメージの払拭に躍起になっていた。

町の中にあるもので自立を

政府の石炭鉱業審議会は平成3年、「90年代が構造調整の最終段階」との答申を出し、平成11年には「石炭政策の円滑な完了」に向けた方針が出され、ついに産炭法は平成13年度をもって終了することとなった。

空知支庁の地域政策課に赴任した当時の産炭地振興係長をはじめ地域政策課のメンバーは、産炭法の期限も控え、今まではいろいろお金も下りてきたけれどこれからはそうはいかない、人口は減る一方だし、産業も育たないという現状をどうしたら打破できるかを考えていた。

まちができて以来、国中から望まれて石炭を供給する売り手の立場だった。炭鉱会社のもとで、石炭を掘るという共通の目標に力を尽くしてさえいれば生活と繁栄が保障されていた。炭鉱が必要とされなくなり閉山した後も、産炭法により救いの手がさしのべられていて、市役所にも住民にも、そうしたある意味受け身な態勢が染みついていた。

もう外からの助けは望めない。町の中にあるもので自立して行かなければならないと考えたとき、そこには住民たちがゴミと呼んで背を向けていた炭鉱遺産があった。しかし、炭鉱と縁もしがらみもない、外からやってきた人間が客観的にみたとき、それは決して無意味なものではなかった。

そらち・炭鉱（やま）の記憶

平成10年、空知支庁は「そらち・炭鉱（やま）」



みかさ炭鉱の記憶再生塾が主催している「幌内歩こう会」の様
元炭鉱マンが参加者に当時の話を参加者に語っている

ま)の記憶調査事業」をスタートさせた。まずは現在何が残されているのかを調査してとりまとめる。生産施設や生活施設といった有形の建造物もちろん対象だ。しかし、自然環境の厳しい山あいの中のごく狭い地域に、必要十分な機能が整った都市があり、石炭を掘るというひとつの目的に向かい、国を背負うという誇りと異様なまでの活気の中で営まれたコミュニティは、たいへんな異彩を放っていた。この無形の部分こそがまた炭鉱のまちの迫力、魅力、そして説得力を持つ。踊りや祭り、料理などの風習から、ドラマやエピソードに至るまで、有形無形を問わず後世に残すために再確認するのである。

その先には「そらち・炭鉱の記憶コミュニティ・ミュージアム構想」がある。この構想はエコミュージアムの概念を強く意識している。ひとくちでいえば、まち全体が「屋根のない博物館」ということだが、保存して紹介するのにとどまらず、まち自らが、このまちのコミュニティのこれまでとこれからについて考え、醸成させ新たな価値を創造しようとするところに目的がある。

この構想を受けて、空知産炭地域の7市町(夕張・三笠・美唄・上砂川・歌志内・赤平・芦別)で市民グループが組織され活動を始めた。

炭鉱の記憶調査事業は平成11年度末にとりまとめられ、その内容は空知支庁のインターネットサイト(<http://www.sorachi.pref.hokkaido.jp/so-tssak/yama/index.html>)でも見ることができる。翌平成12年度は「そらち・炭鉱(やま)の記憶推進事業」としてシフトし、市民グループの活動を支援する。

異例の3年延長

道の事業は通常3年で終了するが、炭鉱の記憶事業はなかなかの盛り上がりを見せた。それは、世の中の価値観が多様化してきた側面もあるかもしれない。地域外からやってくる人たちも徐々に増えてきた。単に廃墟の愛好家であったり、写真やスケッチなど芸術の対象とする人々であったり、遺構の裏側に垣間見えるかつての炭鉱のコミュニティに興味



大正時代に建てられた煉瓦建て変電所の中で開催されたブロックハウス博士とのワークショップ(三笠市幌内)

を持つ人もいる。炭鉱に背を向けていた元炭鉱マンたちも、年齢を重ねたことで過去に目を向けやすくなったかもしれない。かつてのいさかみや悲しい思い出なども、時間が経ったことでほとぼりもさめつつある。このまま黙って風化させるのも忍びないと感じた人もいるだろう。それ以前に、時代の大きな変化の中でとにかくこのままではいけないという危機感を抱いた人もいるだろう。時代の流れの中で、この事業が絶妙なタイミングで波に乗り始めたのかもしれない。

事業はさらに3年延長され、平成13年度からは「そらち・炭鉱(やま)のまちからの挑戦事業」として市民グループの活動支援を継続する。

背を向けつつも捨てていない誇り

この事業が進行するうえで、まちづくりコーディネーターの吉岡宏高氏が奔走している。吉岡氏自身も幌内の出身で、炭鉱社会を見て育った。シンクタンク勤務時代から産炭地に限らずまちづくりに関わってきた経験をもとに、空知支庁の事業にも関わっている。

地域の人たちに話をきいてみると、「そんなのもうどうでもいい」「どうしてそんなことするんだ」という声も多かったのも確か。でもそうはいっていながら、さらに踏み込んで聞くと、思いのたけが一拳に吹き出してくるといふ。「やっぱりあれだけ過酷な労働を耐えてきた人たちですし、日本のために役立ってきた誇りがあるんですよね。コミュニティの非常に濃密な社会ですから、そこで暮らしたい思い出もわるい思い出も、閉山してある程度時間が経ったのも幸いして、水を向けたら

ドドドと出てくるってことがわかってきた」と吉岡氏。

流れをつなぐために

ついに産炭法期限を迎えた平成13年秋、空知の炭鉱遺産群が北海道遺産に認定され、次第に地域の意識も変わり始める。延長された空知支庁の事業だが、平成15年度で支庁としての事業は終了する予定だ。

しかし、市民グループの活動はまだまだ基盤ができておらず、せっかく芽吹いてきた流れが支庁の事業終了後頓挫してしまいかねない。事業終了後の活動の動機付けや仕組みを確保する目的で、平成15年3月に、市民グループのリーダーたちと札幌圏の有識者らで「産業遺産を活かす地域活性化実行委員会」が立ち上げられた。

その最初の取り組みとして今年7月、ドイツのルール地方で先行事例として1989年から実施され成果をあげている「IBAエムシャーパーク構想」に携わったヴィルヘルム・レームブルック美術館館長のクリストフ・ブロックハウス博士を招き、博士の講演で産業遺産活用による地域再生について学び、ワークショップを開催した。

また、日本で開催されることが決まっていた鉱山の学会、第6回国際鉱山ヒストリー会議を赤平市が誘致し、今年9月に開催された。空知の炭鉱遺跡が海外にも広く紹介されて高い評価を受け、空知の炭鉱遺産が決してゴミではないことを内外に印象づけた。

認められる生きがい

吉岡氏は「いまこういう活動に参画してくれてる元炭鉱マンってすごく元気いですよ。この前ブロックハウス博士と歩くワークショップのために選炭場の跡を公園のようにして草刈りしたんですけど、いちばん元気だったのは70超えてる炭鉱マン。こんな楽しいことはない生き生きしてました。そういうふうになると、ちょっとお金をもらえて、健康に生きがいをもって暮らしていける。そうすると地域の医療費低減にもつながる。やっぱり人間ってのは、社会に認められてるとか、自分のやってきたことをもう一度追体験すると

というような精神的なものって、高齢化社会では特に重要だと思います」と、裾野の可能性の確かな手応えを語る。

また、「炭鉱社会ではひとりで何かをすることより、結束して共同でやる仕事ですから。それには先山^{さきやま}という親方が必要なんですけれど、地域にまだ出てきてないですね。先山になって段取りをつける人が地元主体で出てくれば、けっこう力強く事が進んでいくと思うんです」と、炭鉱社会出身者ならではの着目も。

誇りを取り戻して新たな価値を

通常こうした地域振興の手法が軌道に乗るのには10年ほどの時間がかかる。吉岡氏は、いまかなり早回しでやっているという。「それでもここ1~2年ですよ。今まであんなもの、ほんとに、ゴミって行ってました。かっかわるい。あんなもん早く潰せ潰せ、と。でも、おや？いいものなのかな？なんか見に来てるぞ。ドイツ人も来たぞと（笑）。で、素晴らしいっていつてると。これはどういうことだ？ってというのがようやく最近なんですよ」

産炭地に縁のない人間にとっては、炭鉱社会のコミュニティはよく知られていないことが多い。山あいの狭い場所に残る構造物は見るだけでもその巨大さに圧倒されるが、それがそこに存在している意味や、炭鉱社会の特異な姿も、知ればきっと大いに圧倒されるだろう。特に、石炭とすら縁のない若い世代には、むしろぜひ知られるべきかもしれない。

閉じた蓋を開き、誇りを取り戻したとき、産炭地域はきっと力強く動き出すに違いない。



国際鉱山ヒストリー会議のヘリテージツアー（遺産ツアー）空知で最も保存状態の良い住友赤平炭鉱立坑に国内外の参加者は目を見張った